

高校生と地域が持ちつ持たれつの関係を築けるスペース ～駅近くの古民家を活用した提案～

長野県大町市 大崎 凌



1. はじめに

私は令和5年7月に長野県大町市へ移住し、地域おこし協力隊に従事している。任務は、当市の清冽豊富な水を切り口にした地域ブランディング「信濃おおまち みずのわプロジェクト」である。令和8年の退任後は市内での定住を念頭に、地域おこしの活動と並行してカフェの開業を目指している。

市内の上水道は水源が湧水であり、不純物が非常に少なく浄水場が無い。尚且つ硬度15[mg/L]前後の軟水のため、コーヒーの味や香り成分が抽出されやすく、カフェ営業に最適である。この澄んだ水に恵まれた環境を活かして地域内外の人に美味しいコーヒーを飲んでもらうためカフェに決めた。

その後、地域交流活動の中で関わった方々から地域課題を聞き、またカフェを営むための物件探しをしていたところ、駅の近くで大きな古民家と出会う。これらの出来事により、本物件を活かして地域課題の解決に取り組めないかを考えるに至った。

2. 長野県大町市の概要

長野県の北西部、日本の中央やや北部に聳える北アルプスの東側の麓に位置し、人口は約25,341人(令和6年11月30日現在)である。標高は平地で650～850m。塩の道(千國街道/糸魚川街道)で塩や物資を中継した宿場町であり、江戸後期から大正期に建てられた古い町家や蔵が今でも数多く現存している。山岳観光エリアである立山黒部アルペンルートの信州側の玄関口として、また国際的な観光エリアである白馬や松本地域の中間として、国内外から多くの観光客が市内を通る。訪れる観光客の全体入込数(令和元年)は272万人で、そのうち90万人が立山黒部関連とされる。

旧街道筋である本通り(中央通り)沿いを中心に、市街地がJR信濃大町駅より北に1.5km程度伸びているが、商店や飲食店といった商業店舗が集中するエリアは駅寄りの概ね東西300m×南北800mの歩いてまわれる範囲に集中している。

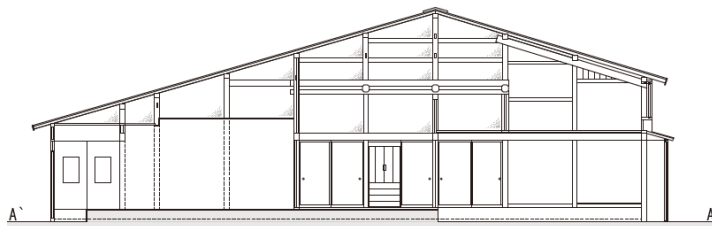


図1 大町市の位置と中心市街地エリア(大町市 HP 画像と Google Earth を元に筆者加筆)

3. 物件活用計画概要

(1) 古民家「重田屋」の概要

私が出店予定の建物は駅から徒歩5分に位置し、信州大学の調査により築約180年と推定される江戸後期の古民家兼店舗の建造物であり、国の登録有形文化財への登録を進めている。母屋の床面積は、1階は161.22㎡、2階は46.27㎡、計207.49㎡である。屋号を重



田屋(しげたや)といい、この地を治めた豪族仁科氏の家臣として平安時代後期に京都より移り住んだ十人衆の末裔と伝えられる名家平林家の旧住宅である。

図2 旧平林家住宅兼店舗「重田屋」の断面図([シゲタヤ] 調査資料より転載)

梁や柱に継手や仕口跡があることから、江戸後期の大火で焼け落ちる以前の建物の燃え残った部材や他の建物の部材を寄せ集めて組み合わせたことが伺える(大火の翌年に建ったとのこと)。梁の一部には鉦(ちょうな)の研り跡が残っている。



図3 継手と仕口の跡(筆者撮影)



図4 鉦の研り痕が残る梁(筆者撮影)

屋根は低く、一部を物置にする程度で殆どの2階の空間を閉じている。柱には杉、梁には

松(おそらく赤松)が使用されている。主にこの一帯に生育する樹種で建築されつつ、来客のある表の柱にはこの辺りには生息しない貴重な檜が使用されている。

(2) 多くの出会い

① 焙煎所との出会い

令和5年7月、市内のカフェを巡っていたところ、私にコーヒー焙煎や経営について教えてくださるカフェオーナーで実業家の松浦氏と出会い、トレーニングの契約を結ぶ。松浦氏はコーヒー焙煎豆販売の経営実績があり、特に焙煎の煎り分けや再現性においては群を抜く。私はこの方から焙煎やドリップを教わっているだけでなく、長野県最大のコーヒーイベントの運営や店番に携わらせていただき、短い期間に多くの経験を積ませていただいたことが私の人生に大きく影響を及ぼしている。

大町の軟水と私が培った技術で淹れたコーヒーを多くの人に飲んでもらいたい。また、カフェを訪れてくださった地域の人や来訪者が交流できる、大手チェーン店ではできない地域密着型のカフェにしたいと考えている。

② 古民家大家との出会い

本物件の大家である平林氏は、JICAの地域共生アドバイザーとしてアフリカやアジアで活動している。元々は大家自らが日本へ帰国後に本物件を用いて宿泊業を行い、世界中で知り合った人たちを日本に呼んで泊まっていたくつもりであった。また、近年の外国人観光客需要の増加が立山黒部アルペンルートや白馬エリアでもみられていることから、古民家に惹かれた外国人観光客に来てもらうことを想定されていた。しかし構想半ばで再び海外赴任が決まり、そこへ私が現れたため、「地域の人と金と価値と空気を循環させてほしい」、「店ができれば世界中で知り合った人を呼ぶ」と言い残してタイへ旅立った。こうして建物の管理も兼ねて使用する運びとなった。地域に住みながら地域のために利用したいという私の考えを受け入れていただいた形となった。私はこの夢を実現するために古民家宿泊施設を設けたい。

③ コミュニティスクールとの出会い

廃校となった大町市立第一中学校の校舎を使い令和5年10月にコミュニティスクールでハロウィンイベントが行われ、中高生や保護者など、1日で657人が来場し大盛況となった。私も参加したこのイベントでは大人はあくまでも申請や交通誘導等など裏方で関わるのみで、中学生のサポートとして大きな力を発揮したのが、かつてこの中学校に通っていた高校生たちであった。人口減少や少子化が叫ばれる中、現実には地域と関わりたい子供が私の想像よりも遥かに多く、子供が動くにつられて大人も動くことを知った。コミュニティスクールの企画や運営をなさっている勝野氏にお話を伺ったところ、「地域には子供の発想が必要で、子供は大きな力を持っている。社会に関わりたい子供たちはいるんだけど、きっかけや方法がわからない。そういった子供たちに地域と関わるきっかけ与えることがこれからの大町に必要。大人は一度決めたことを繰り返しやろうとするけれど、子供は毎回違う。大

人がやるよりも子供たちのアイディアで子供たち主導でやる方が子供たちや地域のためになる。コミュニティスクールは学校から一歩引いた組織でありながら中学校を借りて行事を行っている現状のため、もしもまちなかに使えるスペースがあれば一歩飛び出した感覚で活動できる。尚且つ学校からも歩いて行ける。子供が携わるきっかけになれば。」と仰っていた。実際に目の当たりにした私は、中高生の地域活動にも使えるカフェにしたいと考えた。

④ 出会いを活かしたスペース

こうした多くの出会いにより次第に地域へと目が向き、出会った人たちの考えを反映させたカフェを営みたいと考え、「自家焙煎ハンドドリップコーヒーの提供」、「古民家を活かした宿泊施設」、「中高生が地域交流できる場所」、これらが実現できるカフェを目指す決断をした。

4. 大町市の地域課題

(1) 高校生が“居られる場所”が無い件

私が中学校のコミュニティスクールのボランティアに参加した際、子供たちの事情に詳しいイベント運営の方から「高校生が学校と家以外で勉強や休憩等の目的で居られる場所がない」、「高校生が電車待ちの時間調整で居られる場所が駅前に無い」という話を伺った。

最寄りの公共交通機関である JR 大糸線はローカル線のため、時間帯や方面によっては 1 時間半前後の待ち時間が生じるため、放課後の行動パターンが少なからず時刻表に束縛される。しかし、駅周辺を確認した結果、学校と駅の間に待ち時間を有効に使えるような施設は見受けられなかった。

以前は駅前にショッピングセンターがあり、店での買い物に加え、フリースペースでの自習やグループ学習をしていたと聞く。しかしそれが取り壊され、少し離れた場所にスーパーマーケットとして移転したことで、駅から徒歩圏内に居られる場所が無くなってしまった。市内の高校は令和 6 年 4 月現在 578 人中 370 人 (64%) が電車通学者であることから、駅の近くで電車待ちできる場所がないことは大半の生徒に関わることを意味する。

また、図書館は駅とは反対方向にあり、電車通学の学生にはアクセスしづらい。

加えて当市の場合、冬は標高の高さ故にマイナス 20℃近くと寒く、逆に夏は日差しの強さと 35℃を超える暑さとなる。そういった気象条件を回避しながら快適に過ごせる場所が駅の待合室以外に少なく、市内の多くのカフェや飲食店は閉店時間が早く長居できず、帰宅時間帯に利用するのが難しい。

(2) 高校生へのヒヤリング

確認のため、大町市立大町図書館協力の元、自習中の高校生 2 人に聞き取り調査を行った。図書館内には数名の高校生らしき姿があり、自習室に男性 4 人、エントランスホールのカウンターに男性 2 人、図書室のホールにあるテーブルに女性 4 人が自習やグループワークをしていた。そのうち 2 人からそれぞれ話を伺った。

同市内の学校に通う3年生の生徒1人は、大町図書館をよく利用しており、特に土日は毎週通っているとのことである。ここ以外を使うとすれば自宅か友達の家へ行くそうだ。どの辺りにスペースがあればいいかを尋ねたところ、駅前にスペースがあると電車で帰ってきてから勉強できて使い勝手が良いとの回答を得た。

長野県大町岳陽高等学校に通う3年生の生徒1人も大町図書館をよく利用するとのことだ。ここ以外の場所は思い当たらず、使うとすれば学校の教室かラウンジとのこと。同じ質問に、やはり駅前辺りが良いことが分かった。電車通学の友達が多く、集まるのも解散も楽だからというのが理由だ。また、飲食しながら勉強できる広い場所があればとのことであった。

高校からは駅と反対方向にある図書館でランダムに選ばれた2人が口を揃えて駅前にスペース設置を希望していたことは驚きであり、聞こえてくる噂は少なからず現実には即したものであると実感した。また、市内施設の利用者は、市内の高校生だけでなく、市外の高校から電車で大町へ帰ってきてから利用する生徒もいることがわかった。

(3) 高校生へのアンケート

次に、長野県大町岳陽高等学校にご協力いただき、通学における交通手段と待ち時間の活用状況を把握するためにアンケート実施した。令和6年10月23日から11月23日までの期間、インターネットのアンケートフォームを用いて実施し、38件の回答をいただいた。

① 質問1

質問1. 通学に利用する主な交通手段を教えてください。※徒歩と自転車の場合は、公共交通機関を使わない場合に選択をお願いします。



図5 アンケート結果①（集計結果を元に筆者が作成）

（15.7%）徒歩：81人（14.0%）、その他（親の送迎など）：29人（5.0%）であり、偏りや多少の変化がみられたものと推測し、回答結果は概ね信頼できるものとする。

質問1では、通学に利用する主な交通手段として、「電車」と回答した人が全体の73.7%（28人）を占めた。令和6年4月時点で高校側が把握する通学手段は、全校生徒578人に対して電車：370人（64.0%）、バス：7人（1.2%）、自転車：91人

② 質問2

質問2. 普段、学校や部活が終わった後はどうしていますか？

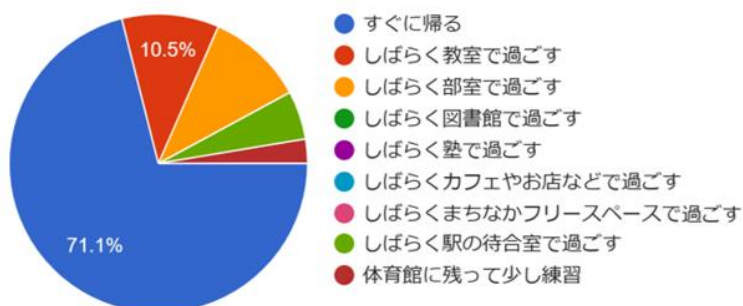


図6 アンケート結果②（集計結果を元に筆者が作成）

という結果となった。

③ 質問3

質問3. 電車を利用されている方に質問です。下校時、平均的な電車の待ち時間はどれくらいですか？

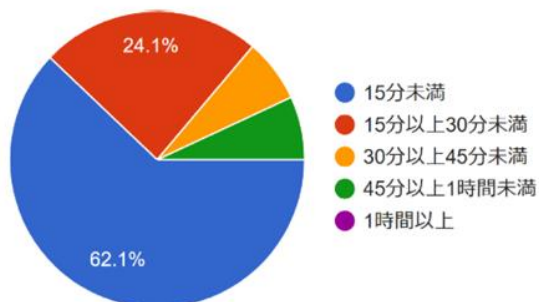


図7 アンケート結果③（集計結果を元に筆者が作成）

ありきで行動していると推測される。

④ 質問4

質問4. 電車を利用されている方に質問です。放課後、電車待ち(時間調整)のために普段最もよくいる場所はどちらですか？

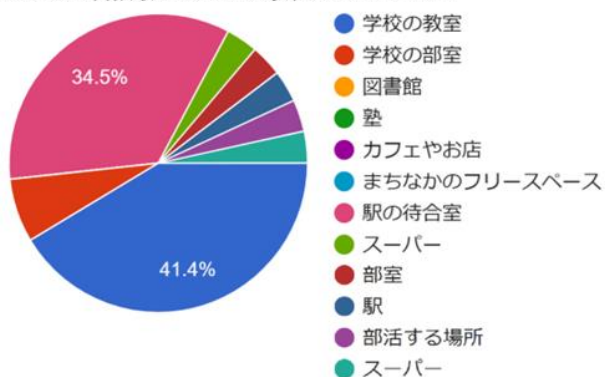


図8 アンケート結果④（集計結果を元に筆者が作成）

質問2では、放課後の行動として、「すぐに帰る」が71.1%(27人)であった。どこかで過ごす人は、教室や部室、体育館といった学校施設と、駅の待合室やホームで過ごす意見がある一方で、カフェや街中フリースペースの利用者は0%

質問3では、電車利用者の下校時の平均的な電車の待ち時間として、15分未満が62.1%(18人)、15分以上30分未満が24.1%(7人)となった。1時間前後に1本の電車に対して待ち時間が予想よりも少ないことから、学校での時間調整

質問4では、電車利用者の電車待ちで利用する場所として、学校施設を合わせて41.4%(12人)、駅の施設を合わせて55.1%(16人)という両極端な結果より、授業や部活動が終わった時刻次第で学習や部活を延長し、時間調整後に学校を出発していると推測される。一方でスーパーという

回答が3.4%あり、恐らく私が時々目撃する人であろう。

⑤ 質問5

質問5. もしも、信濃大町駅の近くに、カフェ併設のフリースペース(無料で自習等ができるスペース)があったら、どれくらいの頻度で利用してみたいですか？

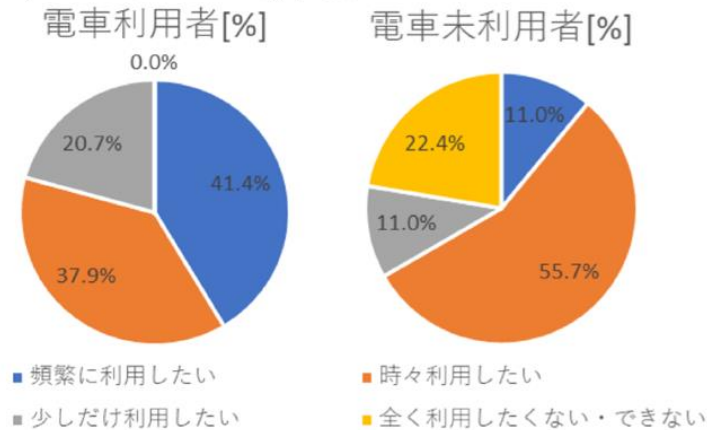


図9 アンケート結果⑤(集計結果を元に筆者が作成)

質問5では、フリースペースがあったと仮定した場合の利用の頻度として、電車利用者は、「頻繁に利用したい」と「時々利用したい」を合わせて79.3%(23人)となり、少しだけ利用したい人を合わせると回答者全員が利用したいという結果となった。また、電車を利用しない人は、「頻繁に利用した

い」と「時々利用したい」を合わせて66.7%(6人)となった。この結果は予想外であり、電車利用の有無に関わらず、スペースの設置が高校生全体に望まれていることが示された。

⑥ 質問6

「もしも大町のまちなかにあったら高頻度で利用したいと思う場所やイベント、欲しい店や設備などがあれば教えてください。また、大町に対するあなたの思いがあれば自由にお聞かせください。」という質問に対しては、図10の示す通りとなった。

ブリクラ
勉強や気分転換のできる広いスペースのある場所
ショッピングモール
スターバックス
スタバや駅の近くに有名な食べ物屋さん欲しい
出来るだけ友達と遊んだりする所を作って欲しい
スターバックスコーヒー、サイゼリヤ、ドトールコーヒーなど勉強ができたり、暇を潰せる場所
静かにゆっくり過ごせるカフェ
高校生が遊べる場所
街灯を付けてください バスケのゴールを運動公園に作ってください スターバックスを作ってください
スタバとブリ機が欲しいです
スターバックスなどのカフェ屋さん

図10 高校生がまちなかに欲しい機能 回答結果

5. 問題から考える仮説

ヒヤリングやアンケート結果をまとめると、高校生は「学校での時間調整ありきで駅へ向かっている」、「駅周辺にフリースペースがあれば便利なので利用したい」、「勉強や暇つぶしできる場所が欲しい」ということが読み取れる。

居られる場所の問題は深刻な地域課題とまではいえないが、確かに存在する地域の困りごとである。その課題に向き合うことで高校生に寄り添い現状課題を解決する。またそれらを通して結果的に大町市を好きになってもらうことを念頭に、単なる自習スペースとは差別化した様々な仕掛けが必要である。「自分たちでこのスペースをつくっていく」という共通の目標の下で仕掛けをカスタマイズしていくことで、次の世代の高校生にも快適に過ごしてもらいたい。

建物の広さを考えると全ての高校生が入ることは困難であるが、最初は図書館で見かけた10人のために、また時々スーパーのイートインスペースでみかける1人のために、夏は涼しく冬は暖かい空間を提供するところから始めたい。

6. 提案

(1) 支える一方で支えられる持ちつ持たれつの関係

前提として、私が元々計画している施設機能（「自家焙煎ハンドドリップコーヒーの提供」、「古民家を活かした宿泊施設」、「中高生が地域交流できる場所」）を活かしながら様々な仕掛け仕組みを設けることにより、「高校生が居られる場所」という地域課題の解決ができないかを考え提案する。

地域課題解決の手段として机と椅子を置くが、それだけでなく、高校生がスペース(物理的に居られる場所)を使う「支えられる側」になる対価として、地域について考え行動できる「支える側」にまわれる仕掛け(社会的に居られる場所)を用意することにより地域貢献できないかを考える。

施設を訪れる理由は、勉強したい人、くつろぎたい人、暇つぶししたい人など様々なため、強要はせずあくまで自由であるが、家でも学校でもないここだからできる仕掛けを選択し利用できる機会をつくる。

(2) 条件の活用

① 立地の活用



図 11 施設の位置関係 (Google Earth を元に筆者が作成)

偶然にも駅の近くに施設を借りられたことから、高校生は電車到着の直前まで自習が行え、またカフェメニューを楽しみながらリラックスすることもできる。

現在自習室として機能している図書館は、高校から駅とは逆方向に片道 1000m(約 13 分)あることから、駅前にスペースがあることで電車利用者の利用の地理的ハードルが大きく下がると考える。

駅の近くで各々の時間を過ごせるという選択肢が高校生にできることで、大町市に住む生徒にも、市外から通う生徒にも、また大町市から市外の高校へ通う生徒にも利用可能である。集まりやすいことで、自習だけでなくグループワークにも使える。

② 古民家の活用

古民家は、地域にあり続けたことで景色に馴染みながらも、年齢が若い世代にとっては非現実的に感じられる不思議な空間となる。一方で古民家は地域の高齢者や大人たちに親しみのある空間のため、世代を超えた交流の場を提供することができると思う。

また、地域資源を利用することは新たに建物を建てるよりも経済的に低コストでのスタートが可能となる。

そして何といっても古民家は日本の古い文化を味わえるため、外国人観光客のバックパッカーが来訪することも期待できる。そうした来訪者と地域との関係が単なる宿泊に留まるのは、双方にとってもったいないことであり、訪れた人々に何かしら印象深く、思い出に残るような体験の提供が重要と考える。(後述)。

当物件は江戸後期から戦後まで増築を繰り返しており、柱や梁にそれぞれストーリーがある。地域の林業関係者の解説で建物内をみてまわった際は樹種や年台、運搬、建築、産地の予想など、目から鱗の非常に興味深い話であった。高校生が来訪者を連れて建物探訪ガイドをする仕組みをつくりたい。

(3) 高校生を巻き込んだ仕掛け

① 高校生×カフェの仕掛け

一部のカフェメニューを考案する際に、高校生が高校生のためのメニューを考案する。高校生の意見が反映する仕組みをつくることで、地域貢献の意識が醸成されることを狙う。

「自分たちがつくった」という誇りを持つことで愛着が湧くと考ええる。

例えばコーヒー系のメニューをつくる際、取り扱う豆の焙煎度合いを変えて試飲してもらい、高校生にとって最も好みの度合いで煎り止めする。また豆の種類や精製方法によってはまるでトロピカルジュースや紅茶の様なフルーティーな香りや味を楽しめるため、これらを加味して高校生に豆を選んでもらう。水とコーヒーについて学んでいる私が丁寧にアドバイスするため、メニューが完成する頃には、高校生はコーヒーの知識だけでなく、大町市の水の良さについて誇りを持って他の人に語れるようになるであろう。

② 高校生×来訪者の仕掛け

高校生が観光客に自分たちの街を案内する地元ガイドになってもらうことで、単なる生徒と来訪者という関係を超えた交流ができる。高校生はまちについての知識を深め、来訪者は「高校生に案内してもらった」という普通ではできない体験により、このまちでの思い出が印象深く残ることであろう。はじめは試験的に行い、次第にそれ目当ての来訪の増加を目指す。

まちなかを案内するにはまちについて調べて知識をつける必要があるため、自身の足でまちなかを歩いて、時には地域の人と会話をし、資料等を調べる必要がある。それにより、実際にまちにはどういったものがあるのかを確かめることで、自分が住むまちに詳しくなる。しかし、せっかく古民家目当てに来訪者(特に外国人観光客)が訪れる物件であるため、地域の人が日常生活の中では得られない来訪者目線で建物やのまちの印象や気になることについて、高校生が来訪者に尋ねてまとめられるようにする。具体的には、高校生がいる夕方時間帯に宿泊しに来た来訪者に対して、同意のもとでインタビューをする。外国語でのコミュニケーションとなることが多いであろうが、それも経験となる。ネット記事やメディアではなく目の前にいる人から生の情報を学ぶことで、高校生の好奇心を刺激し視野を広げられると考える。もしも地域の人と異なる視点があれば、それこそ地域の価値として気づくことができる。そして、そこで得られた内容を元に手作りパンフレットを作成していき、生の情報を集めてできたパンフレットを片手にまちなかをガイドする。このまちには古い建物が多く、当古民家の解説のほか、まちなかに点在する古民家についてのガイド案内は日本の文化に触れられることから、外国人観光客には喜ばれるものと考えられる。このとき作成したパンフレットは配布も行うことで、他の来訪者や地域の人にも手にすることができる。地域の人が手にすることで、地元の新たな見方を発見し、シビックプライドの醸成に繋がれると考える。また、興味を示した地域の人が当スペースでの活動に加わり出すかもしれない。この連鎖をつくりたい。

③ 高校生×中学生の仕掛け

中学校で行われているコミュニティスクールをまちなかで行うための拠点として当スペースを用いる。まちなかで行うメリットは、より多様でより多くの人と中学生が交流できる機会・経験となることにある。

中学生は普段はできないまちなかでの企画が経験でき、一方で高校生は、義務教育の中学生とは異なりある程度自由度が高く、特に常連は普段からスペースを使い慣らしているため安心して中学生をサポートできる。そして子供が動けば大人も動くため、年齢の壁を越えて地域を巻き込んだイベントへ発展させられると考える。

地域イベントとなると当スペースのみでは収まりきらないため、周辺の店や施設との連携が望ましいが、活性化に積極的な近隣店舗では理解が得られやすく、公園の利用も可能であることから、ある程度広いエリアでのイベント実行が可能となる。実際に令和6年12月に行われた「KAIDO MARKET」では、五日町の市(いち)を復活させるためにエリア内3か所のスペースを同時開放しての開催に成功している。

(4) 関係人口やりターン

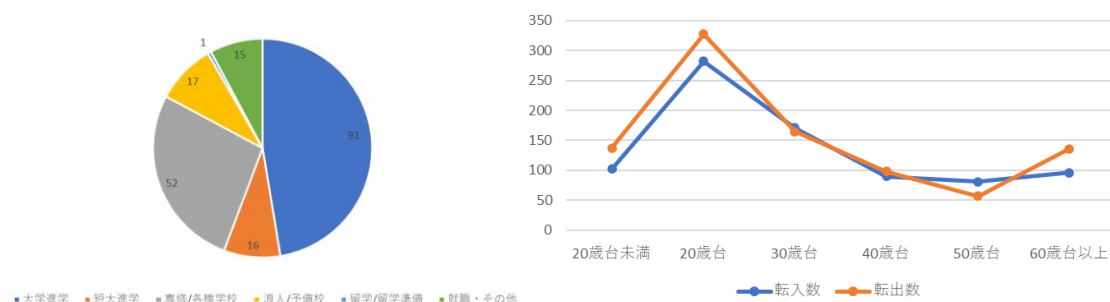


図12(左) 長野県大町岳陽高等学校の進路状況(令和6年3月卒業生) (「日本の学校」が示すデータを元に筆者が作成)

図13(右) 大町市の年齢別転入数・転出数 (RESASが示すデータを元に筆者が作成)

これまでの、高校生の居られる場所づくりについて、「ハード面(スペース)」と「ソフト面(地域への関わり)」の両方の視点から提案を行ってきた。ここでは、これらの提案が大町市にもたらす影響について考察する。

市内の高校は長野県大町岳陽高等学校の1校のみで、高等教育機関はない。高校時代は市外の学校へ通う場合も自宅から通うことが多いであろうが、大学進学や就職を期に市外や県外へ転出する人が多い。図12と図13の転出数より、「高校卒業を期に市外や県外へ転出する20歳未満」と、「高校卒業後も当市内から近隣市町村の学校へ通学していたが、就職を期に市外や県外へ転出する20歳台」が影響しているのではないかと考える。

高校時代はいわば地元で暮らす最後の時期になる人も多いと考えられる。勿論当市ですっと暮らしていくことは歓迎だが、大学進学や就職時点での転出抑制により社会減を抑えようとする、当市内にいてだけでは実現できない個々の進路や夢を阻害することになりかねない。そうではなく、例えば場所にとらわれずに日本中・世界中へ自由に羽ばたいたとし

でも、当市内で過ごした時期に愛着が醸成できることで、ある日戻ってきて何かを始めたり、身を肥やして(技術を身に着けて)仕事を持ってきたりと、Uターンや関係人口として地域づくりに携わり続けるきっかけになるかもしれない。そういった選択肢が頭の片隅にある人を多くつくるのが当市にとって非常に重要になると考える。様々な仕掛けを通して、羽ばたき盛りの時期に当市での印象深い経験や良い思い出を刻める仕掛けを提供できるよう努めたい。

高校時代は、世の中のことが見え始め、尚且つこの地域にまだ住んでいたり関わっている期間でありながら、やりたいことや進路が明確に定まらない人生の分岐点となる時期といえる。その時期にまちと関わるきっかけをつくり、人生の選択肢を多様にしたい。今この街に住んでいたり、通っている若者である高校生こそ地域の宝である。地元での面白い経験は、きっと将来的に地域への愛着に繋がるであろう。

7. おわりに

本レポートでは、高校生と地域が持ちつ持たれつの関係を築けるスペースの仕掛けを提案した。それらの実現により、高校生をはじめとする様々な立場の人が当スペースを利用し、地域の人や来訪者と高校生との交流を通じて互いを支える仕組みを構築し、当時の高校生が例え外へ出て行ったとしても、いつの日か帰ってきて当スペースや地域を支える人になってくれたら本望である。

私にとって、大町市は地域性も自然環境も好きなまちである。47都道府県を旅して比較したうえで移住に至った。若い世代が今後も大町市を大切に思ってくれる様に、このまちの魅力を魅力と感じられる価値観を、未来を担う若い世代に共有していくことが私の使命である。それにより、かつて支えられた側が今度は支える側にまわる連鎖にも繋がって欲しい。

江戸時代より継ぎ接ぎで拡張されてきた重田屋だが、建物全体に大掛かりな手が加わるのは江戸後期の大火後の建て替え以来初めてとなる。地域づくりに励みながらこの地域を味わいたい。

参考資料

- ・大町市観光振興計画 ～ コロナからの回復に向けて ～
- ・Google Earth
- ・RESAS From-To 分析(定住人口)総務省「住民基本台帳人口移動報告」
- ・RESAS 人口構成 人口推移 総務省「国勢調査」、厚生労働省「人口動態調査」、国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」
- ・大町市中心市街地活性化計画[第4次計画](資料：商業統計調査 大規模小売店含)
- ・日本の学校 大町岳陽高等学校
(https://school.js88.com/sc1_h/22026780?page=8)
- ・信州大学梅干野研究室 大町市平林家住宅[シゲタヤ] 調査資料